

# 青森港の あゆみ・いま・みらい



Shingo Satomura 2015  
「あおり北のまほろば歴史館」展望室から望む青森港

● 編集・発行 ●

青森港国際化推進協議会

青森港国際化推進協議会事務局

〒030-8555 青森市中央1丁目22番5号 青森市交流推進課内



## 目次

はじめに	
青森は「海の日」ゆかりの地	p.2
1 青森港のあゆみ	
青森港のはじまり	p.3
80年間も活躍した青函連絡船	p.4
2 青函連絡船「八甲田丸」	
八甲田丸について	p.5
八甲田丸主要データ	p.6
3 青森港のいま	
青森港の概要と役割	p.7
4 青森港のみらい	
物流・防災・交流・環境	p.9

## はじめに

# 青森は「海の日」ゆかりの地

- 青い海公園の一角にある<sup>せいとく</sup>聖徳公園に、「海の記念日発祥の地」と書かれた碑が建てられていることを知っていますか？
- 明治9年（1876）7月16日、明治天皇が東北・北海道御巡幸のときに、<sup>こじゅんこう</sup>灯台視察船「明治丸」に乗って青森から出港し、函館を経由して7月20日に横浜港に到着しました。
- この横浜到着日を記念して、昭和16年に7月20日が「海の記念日」に制定されました。このことから、青森は「海の記念日」が定められた記念の地（発祥の地）といわれています。  
※海の記念日は、平成8年からは、国民の祝日「海の日」となっています。
- このように青森は海と深く関わりながら発展してきました。青函連絡船の運航が開始されると、たくさんの人々と物資が行き交い、北海道と本州を結ぶ拠点となりました。そして現在は、国際貿易港として、海の玄関として、観光、物流、交通などの面でとても重要な役割を果たしています。
- それでは、青森港のあゆみを振り返りながら、青森港のいまの様子と青森港の未来像を紹介していきましょう。

## 青森港のはじまり

— 青森開港は今から約400年前 —

- 青森が開港する以前、青森は外浜そとがはまと呼ばれた地にありました。弘前藩は、この外浜地帯に新しい町づくりと湊の建設を構想します。江戸藩邸で消費する御膳米ごぜんまいを青森から廻漕かいそう（船で荷物を運ぶこと）することを目的に、寛永2年（1625）、江戸幕府より津軽から江戸への廻船かいせん運航が許可されました。
- 寛永3年（1626）、弘前藩2代藩主津軽信枚のぶひらは、家臣の森山弥七郎やしちろうに青森の町づくりを命じます。外浜地域の商人船を青森へ集中させるとともに、六斎市ろくさいいち（1か月に6回の定期市）の開催を許可し、青森の町づくりが進められました。
- 開港して3年ほど経った時点で、安方町から堤町まで一応の都市建設がなされ、1,000軒ほどの町家がつくられたといわれています。
- 江戸時代、青森は、日本海海運や太平洋海運などの全国海運に結びつく重要な湊でした。全国各地の廻船でにぎわい、「港町青森」は繁栄を遂げていきました。

## 80年間も活躍した青函連絡船

— 本州と北海道を結ぶ大動脈 —

- 明治41年（1908）、イギリスのデニー社で建造された日本で最初のタービン・エンジンによる商船、「比羅夫丸」ひらふ「田村丸」が就航しました。国鉄による青函連絡船のはじまりです。大正14年（1925）に貨車航送かしゃこうそうも開始されると、青森港は青函経済圏の中心として発展しました。
- 青函連絡船は、本州と北海道を結ぶ幹線交通として、青森市の発展に大きく貢献しましたが、JR津軽海峡線の開通と同時に、昭和63年（1988）3月13日に廃止されました。この時の青森港からの最終航行船が、現在青森港に係留保存されている八甲田丸です。
- 80年もの間活躍した歴代の青函連絡船は56隻あります。そのなかで昭和39年（1964）8月12日に就航した八甲田丸は、就航期間が23年7か月と、最も長く活躍した船です。
- 八甲田丸の車両甲板こうはんは、世界的にも珍しい鉄道車両を輸送するためのスペースで、操舵室そうた、船長室、事務長室、寝台室、エンジンルームは就航当時の状態で保存されています。

昭和 61 (1986) 年当時



### ■ 八甲田丸について

青函連絡船「八甲田丸」は、昭和39(1964)年8月12日の就航【しゅうこう】から、最後の航行となった昭和63(1988)年3月13日まで、23年7ヶ月にわたって青森と函館をつなぐ架け橋となってきました。これは歴代の青函連絡船55隻の中では最長の現役期間です。

最終航行船としての大役も果たしたこの船は、昭和63(1988)年に港湾文化交流施設国内第1号に認定され、その後平成21年(2009)年に経済産業省近代化産業遺産に、平成23(2011)年には青函連絡船と可動橋が機械遺産第44号に認定されています。

現在、メモリアルシップとして棧橋第2岸壁に係留【けいりゅう】されている「八甲田丸」ですが、青函連絡船最後の機関長となった葛西謙司さんは、「今一度ロープを切り離し、お客さんに乗せて津軽海峡に船出してみたい」と語っています。

完全な形で現存する唯一の青函連絡船「八甲田丸」は、いつか再び出航する日を夢見ながら、今は大切に保管・展示されているのです。



竣工後 (第1~3) 日撮影

平成 23 (2011) 年当時

### ■ 八甲田丸主要データ

- 竣工：昭和39(1964)年7月31日
- 就航：昭和39(1964)年8月12日
- 終航：昭和63(1988)年3月13日
- 全長：132m
- 全幅：17.9m
- 総トン数：5,382.65t
- 旅客定員：1,286人
- 積載車両：48両
- 速力：18.2kt(ノット)  
時速約33km
- 自動車航送：12台
- 用途：客載車両渡船
- 製造所：新三菱重工株式会社  
神戸造船所
- 総取扱数：約12,267,000人
- 航海数：37,149航海
- 総貨物取扱数：約13,086,000t



撮影：森内四郎

## 青森港の概要と役割

- 青森港は、北緯40度49分、東経140度45分の本州最北端、陸奥湾の最深部に位置する重要港湾です。本港は、本州と北海道を結ぶ物流拠点、地域産業を支える国際物流の拠点港としての役割を担っており、また、安らぎや潤いを与える港湾として人々に親しまれています。
- 本港の背後地域である青森市は、人口約30万人を擁する県内の主要都市で、産業、経済、文化の中心として発展してきました。また、港や駅のほか、空港も整備されており、今後は北海道新幹線「新青森～新函館北斗」の開業により広域交通のアクセスの更なる拡充が成され、物資流通及び産業経済の拠点としての役割が一層高まると期待されています。
- 重要港湾である青森港は、石油製品やLPG等のエネルギーの供給拠点として青森県内をはじめ北東北の範囲に供給しています。また、本州と北海道を結ぶ物流拠点として、利便性が高く、本州－北海道間のフェリー輸送の約3割を担っています。

- 青森港の本港地区（新中央埠頭）には東北地方で唯一の大型旅客船バース（-10m）が整備されており、景勝地やねぶた祭り等の観光を目的とした大型クルーズ船の寄港が年々増加しています。そして、青森港のウォーターフロント地区には八甲田丸等の観光交流施設があり、クルーズ船の乗客等の観光客だけでなく、多くの市民が訪れる観光スポットとなっています。

（「青森港ビジョン 青函圏から世界へつながるGATE-Port戦略」平成27年2月 青森港みなとづくり懇談会による）



「青森港ビジョン 青函圏から世界へつながる GATE-Port 戦略」  
平成 27 年 2 月 青森港みなとづくり懇談会から転載、一部修正